

<報 告>

中央大学保健体育研究所講演会

日 時：2013年11月28日（木）

演 者：中 塚 義 実 氏

テーマ：オリンピック教育の現状と今後

——2020年をゆたかに楽しむために——

アスリート、タレント、知事など関係者総動員での招致活動がテレビニュース、新聞などでも大きく報じられ注目が高まる中、7年後の東京オリンピックの開催が決まりました。49年前に東京で開催されて以来の夏のオリンピックの開催となりましたが、はたして、受け入れる側の我々は、オリンピックとは何なのかということを理解しているのでしょうか？ 単なる世界規模のスポーツ競技会ではないオリンピックの側面を、オリンピック教育という視点から筑波大学付属高校の中塚義実先生より御講演いただきました。中塚先生は国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムに、筑波大学付属高校の生徒を参加させるという点でもオリンピック教育に深くかかわりを持たれております。オリンピック教育は実は日本でも非常によく似た思想のもとに、スポーツ教育としてすでに行われている現状などもお話下さり、これからの社会を担う学生たちにも、2020年に開催されるオリンピックを、距離的に身近なオリンピックではなく、真の意味で身近に感じてもらうことができると願います。

研究所企画委員長：高村直成

はじめに

皆さん、こんばんは。ご紹介いただきました中塚です。

出身は大阪。大阪府立の高校を出て、1980年に筑波大学に入学しました。入学したのは1980年。オリンピック・イヤーですね。何のオリンピックか分かりますか。皆さん、もっとずっと後に生まれているのですね。モスクワオリンピックです。ただし、日本は参加せず、ボイコットです。なぜボイコットかというと、当時、東西冷戦ですね。オリンピックの前年に、開催国であるソ連がアフガニスタンに軍事介入し、それに対して当時アメリカのカーター大統領が、

よその国に侵略するような国で開かれるオリンピックにわれわれは選手団を出さないということをお願いして、西側の他の国々にも同調を求めたのです。当時日本は、今もそうかもしれませんが、基本的にはアメリカの言いなり。というよりも、日本のスポーツ界が独自の財源を全然持たないで、政府からの補助金で全部やっていた関係で、政府の判断に対して「ノー」と言う自分たちのパワーを持っていなかったということがあり、カーター大統領から日本の政府へ来たものがドンと下りてきて、日本もボイコットとなったのです。

他の西側諸国、フランスやイギリス、カナダ、西ドイツなどの国々も同じような決断を迫られたわけですが、同じようにボイコットを決めた国もありました。確かに平和があつてのスポーツだと。ですから、「よその国を侵略するような国でやるようなオリンピックに、俺は出ないよ」というように判断したプレーヤーがいます。一方で、スポーツと政治は別だと考え「そのようなことがあつたとしても、俺は出るよ」と判断したプレーヤーもいました。個々のプレーヤー、アスリートが自分で判断ができるぐらいの財源を持っていたんですね。そのようなことをよその国はもうすでにやっていた。これではいけないということで、オリンピックに選手団を派遣するJOCという組織が、日体協から分離独立し、自主的な財源を確保し、自立していこうというきっかけになったのも、モスクワのオリンピックです。ただし、後にJOCの会長になった人、長野オリンピックの招致も成功させた、西武グループの堤義明さんですが、お金を集めるのは上手だったけれども、やはりいろいろと問題があつて、失脚してしまいました。なかなか難しいですね。

よく覚えているのが、大学入試。私は共通一次試験の2期生ですが、筑波大学独自の入試もあつて、面接があつて、そのときに、「君は、モスクワオリンピック・ボイコット問題についてどう思うかね」ということを聞かれたわけです。みんな聞かれたのです。だけれども、やはり難しい。たしか、「判断できない」と僕は答えたと思います。どちらの言い分も分かるというような感じでね。もしかするとそれが、私とオリンピックの妙な関わりの始まりなのかもしれません。

その後、筑波大の蹴球部で4年間お世話になって、スポーツ社会学というものに触れて、大学院へそのまま行きました。ちょうどその頃、Jリーグの前のサッカーのプロ化がありました。プロ選手が2人生まれたのは知っていますか。奥寺康彦さん、木村和司さん。そのあたりの動向を修士論文で取り上げ、そのあとご縁があつて今の職場に勤務し、なんと丸26年間、異動もなく、同じところにずっと居続けながら、定点観測をしているというのが現在のところですよ。

いろいろとやっていますが、このような話をしていると中身にいつまでたっても入らないので、中身に入っていきたいと思いますが、皆さんの属性も教えてください。学生の人たち、大

学1年生の人は、どれぐらいいますか。
結構いるな。はい、2年生の人は？3年生の人。4年生。4年生は、卒論はないの？

なるほどね。そうですか。大学院生の人はいるのですか。いないのね。体育会の運動部に所属している人は、どれぐらいいますか。はい。東京にオリンピックが決まってうれしい人は？ そうですか。分かりました。

お題は、このようなことにしております、「2020年をゆたかに楽しむために」、本当は「2020年以降を」なのですけれども、いいでしょう。今日の中身ですが、そもそもオリンピックというのは何だろうというところから確認していきたいと思います。それが、オリンピック教育とは何だろうというところにもつながってきます。国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムという、私自身、関わるようになるまで全く知らなかった高校生の国際交流イベントに生徒を引率していきましたので、その部分は、写真などを使いながら紹介していきたいと思います。オリンピック教育の今とこれからということで、ところどころ質疑の時間も取りたいと思います。恐らく猛烈に早口になってしまうと思います。覚悟しておいてください。

「オリンピック」って何だろう？

「オリンピックって何だろう」から始まります。創設者は、ピエール・ド・クーベルタン。恐らくここにいる人は、このようなことに関心を持っている人たちですね。この名前を聞いたことがある人は、どれぐらいいますか。初めて聞いた人は？ おっと、これは意外だな。そうですか。ちなみに、皆さんすでにご覧になっている、本日のセミナーの案内チラシですが、写真の私の隣にいるおじさんが、ピエール・ド・クーベルタンの妹さんのお孫さんです (p.205, 資料33, ③の写真参照)。クーベルタン家を継いでいる人で、来週、来日されます。

古い話は省略ですが、とりあえず前段として、昔、ギリシャでオリンピックの前身となるような競技会が行われていたのだということぐらいは、押さえておいてください。主要な四つの都市があるのですけれども、その中の一つがオリンピアという都市で、オリンピックというのは、そこから名称が来ているわけですね。その競技会は、紀元前776年から紀元393年まで、

資料1

オリンピックは単に勝ち負けを競うだけでなく、バランスのとれた人間を育て、世界平和を求めるものです。
国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムをご紹介しますながら、オリンピック教育について考えます。

1. 「オリンピック」って何だろう？
・創始者クーベルタンの思想を中心に
2. 「オリンピック教育」って何だろう？
・国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムを中心に
3. 「オリンピック教育」のいまとこれから
-2020年（とそれ以降）を“ゆたかに楽しむ”ために

資料2

オリンピックって何だろう？①

◆創設者ピエール・ド・クーベルタンのおゆみとともに

・1863年パリで生まれる（フランス貴族）

※1870～71 普仏戦争

※英国では1863年にFA、1871年RFUが創設

・1883年（20歳）英国のパブリックスクール視察

・1889年&1893年 アメリカで同志の輪を広げる

・1890年 ウェンロック・オリンピック視察

・1894年（31歳）パリ・アスレティック会議

↓

近代オリンピックの復興
第1回大会を1896年にアテネで開催

1,000年以上ずっと続きました。ギリシャの神様を祭る祭典競技会として長らく続いていたのですが、ローマ帝国に支配され、ローマ帝国がキリスト教を国の教えにした時点でギリシャの神々は異教徒の神様になっていきます。異教徒の神様を祭るようなイベントはだめだということになって、中止になり、そこから長いこと、約1,500年ぐらい、地球上にオリンピックというものはありませんでした。

ところがそのうちギリシャの遺跡を発掘する人たちが出てきて、神話で語られていたものの一部が遺跡として出てきて、「われわれのふるさとギリシャ」の様子が徐々に明らかになっていきます。われわれというのは、ここではヨーロッパ人のことですね。彼らのふるさとのようなものですから、ギリシャというのは、古代ギリシャで祭典競技会をやっていたという記録はあったけれども、本当にやっていたのだということが遺跡の発掘でわかってきて、いろいろな関心が出てきたのが、19世紀の半ばぐらい。ちょうどその頃、近代オリンピックの創始者であるピエール・ド・クーベルタンは、フランスのパリで貴族の子弟として生まれるわけですね。

1863年というどどのようなときかという、クーベルタンが7～8歳ぐらいのときに普仏戦争、プロシアとフランスの間の戦争があって、あっけなくフランスは敗れ去る。国自体がまったりとして、元気のないような、そのような状況です。海に向こうのイギリスはどうかというと、いち早く産業革命を成し遂げ、近代国家イギリス、そして、七つの海を制覇するグレート・ブリテンという感じで、非常に勢いがあるわけですね。

ちなみに多くの近代スポーツが、そのイギリスで生まれます。サッカーをやっている人は、どれぐらいいますか。その中で、中央大学サッカー部の人は？ 結構いるではないですか。1863年、FA 誕生。これは、The Football Association ですね。最初にできたフットボール協会なので、The です。2番めにできたスコットランドのFootball Associationは、Scottish Football Association。ずっと後にできた日本のAssociationは、JFA, Japan Football Association。

クーベルタンが生まれた1863年に、フットボールも生まれているわけです。今年、クーベルタン生誕150周年、フットボール誕生150周年ですね。そこでサッカー派とラグビー派に分かれて、1871年にはラグビーが、ユニオンが創設される、そのような時期です。

当時のフランスの貴族は何をしているのかといたら、別に何をしなくても食べていけるわ

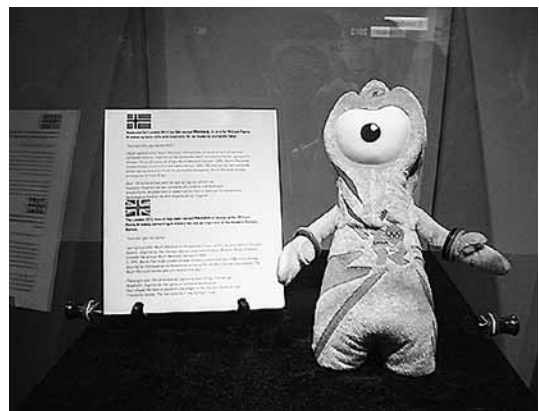
けですが、大体はやはり軍隊、士官になっていくか、あるいは文学や芸術など、そのような方面に向かっていくわけで、ターベルタンも、もしかするとそのような路線に向かっていたかもしれせん。しかし彼は、幼い頃から家庭教育の中でラテン語やヨーロッパの歴史などの勉強をいろいろとす中で、少しずつ古代ギリシャに関心が向いていきます。

それだけではなくて、当時まったりとしていたフランスの教育を何とかしなければいけないという問題意識を、彼はずっと持ち続けます。そして、当時の先進国だったイギリスに何度か足を運び、英国のパブリックスクールを視察に行つて、20歳、ちょうど皆さんぐらいの年代に、「これだ」と感じるものに出会うわけです。当時のパブリックスクール、例えばラグビー校においては、ラグビーというのは学校の名前ですけど、放課後の部活動と申しますか、寮対抗でフットボールがさかんに行われていました。はじめのうちは、先生たちが、血気盛んな生徒たちのエネルギーのはけ口として、ある意味生徒たちを管理する手段としてやらせていたのですが、そのうち生徒同士が自分たちのゲームを作り上げゲームの中で心身が鍛えられ、責任感と申しますか、自分はこのチームに対して何ができるのかということが醸成されるようになっていきます。それが、結果的に近代国家イギリスを担っていく人材育成に非常につながっているようすを見るわけです。イメージは、ハリー・ポッターです。放課後やっていますね、球技を。彼らは魔法使いなので、空中を飛び交う球技だけでも、寮対抗でやります。あのようなイメージでやりながら、自分たちの仲間意識を醸成しつつ、いろいろなものを育てている。「これだ」と感じるわけです。つまり、青少年の教育にスポーツをとというような考え方は、

彼は貴族でお金もたくさんあったので、志の輪を広げるためにあちらこちらに出掛けます。たとえばアメリカで同志の輪を広げたり、ウェンロック・オリンピックを視察します。

これを見たことがありますか（資料3）。見たことがある人？ 何ですか。そう。これは、誰君でしょう。ウェンロック君です。ロンドンのときのオリンピックのキャラクターは、ウェンロック君という名前でした。もう1匹、もう1人というのかな。マンデヴィル君という同じようなキャラクターがいて、それは、パラリンピックのマスコットです。両方、オリンピックと非常に関係がある

資料3



のです。

何がウェンロックかという、第126回アニュアル・ウェンロック・オリンピック・ゲームズと書いてあるように、イギリスの端のウェンロックという町で、1850年からウェンロック・オリンピックというものをやっていたのです。ウィリアム・ベニー・ブルックスというお医者さんが、運動することによって健康になるというようなことを啓蒙する意図で、ウェンロックの市民およびその周辺の人たちを集めて毎年1回やっているものが、もう百何十年も続いている。この町には、その名のとおり「ウィリアム・ベニー・ブルックススクール」という学校があって、後で話をするクーベルタン・スクールの集まりにやってきます。ウェンロックの人たちが、オリンピックの本当のルーツはクーベルタンではなくて、われわれのウィリアム・ベニー・ブルックスなのだということを著した冊子を作っているのですね。クーベルタンは1890年にそこを訪れ、「お、やってるじゃないか。これはいいな」と。

ただし、ウェンロック・オリンピックは、あくまでもローカルなオリンピック。クーベルタンの関心は、もうすでに世界平和というところに向かっています。ちょうど時代が、やはり帝国主義、それぞれの国はまとまろうとしているけれど、お互いの利害関係がぶつかり合って、いろいろなところで戦争が起きている。そのような時期に、お互いのことをリスペクトしながら、平和な社会を作っていこうと。そういえば古代ギリシャのオリンピックでは、オリンピックをやるたびに戦争を休んでいたではないかというようなことも含め、近代オリンピックの復興を提案します。

1894年、日本では日清戦争をやっている頃ですね。海の向こうでは、パリで各国の代表者が集まって、本当はアマチュアリズムとプロフェッショナリズムのことをどうするかという会議だったけれども、そこで近代オリンピックの復興が決まり、第1回大会を1896年、アテネで開催する。

資料4



これは、第1回大会のようすです（資料4）。一番右端がポスターで、これは100mの決勝のようす。よくこのような写真が残っていると思うけれども、おかしいでしょう。この人たちのスタートは、高校生の50m走でタイムを計ると、みんなこのような感じですね。「位置について、よーい」と。優勝したのは、クラウチング・スタートをこのときいち早

く取り入れていた、アメリカの方です。スポーツの技術もまだまだ未開発の状態です。このような競技会を重ねていく中でお互いの技術も海を越えて交換されながら、少しずつ発展して今日に至るわけです。

さて、整理すると、そのような背景でクーベルタンが、近代オリンピックを復興しようとした。彼が目指したことを、「オリンピズム」という言い方で表現しま

す。スポーツをすることで、身体と精神と知性の調和の取れた若者を育成する。異なる国や地域の人とスポーツを行うことで、互いに相手を尊重し、自分とは異なる相手の文化や考え方を理解する。異文化理解、世界平和。そのようないい人が増えていけば、平和でよりよい世界が作られるだろうと、このようなことがクーベルタンの最初の考え方で、これは今も脈々とオリンピック運動のベースにあるわけです。

ですから、オリンピックというと、4年に1回アスリートが集まる運動会の大きいもののように多くの方が考えていると思うけれども、あれはオリンピックのムーブメントの中の一つであって、本当はこれを実現するさまざまな取り組みが、オリンピックが目指しているもの。それを近年、IOC、国際オリンピック委員会は、このような言葉で表現しています。三つの価値、エクセレンス、フレンドシップ、リスペクト。ごく当たり前といえば当たり前なのだけれども、このようなことを、オリンピックの活動の最も重要な価値として位置づけようと。これは教育的な価値が非常にあるのだということで、オリンピズムの教育的価値、ここに挙げているようなことをIOCがしっかり言いながら、それぞれの国で、それぞれの地域で、オリンピズムをしっかり教育の軸に据えながらやっていこうということを言っているわけです。

「オリンピック教育」って何だろう？

では、オリンピック教育とは何だろうということで、ようやくオリンピックと教育がつながってくるわけですが、これについては、このようなものがあるのですね。JOA, Japan Olympic Academy という組織があって、2年前のちょうど今頃国際シンポジウムがあって、このようなタイトルで話をする機会を得ました。今からしばらく、そのときに使ったスライド

資料5

オリンピックって何だろう？②

- ◆クーベルタンが目指したこと ⇒ オリンピズム
 - ・スポーツをすることで、身体と精神と知性の調和のとれた若者を育成する
 - ・異なる国や地域の人々とスポーツを行うことで、互いに相手を尊重し、自分とは異なる相手の文化や考え方を理解する（異文化理解・世界平和）
 - ・スポーツによってよりよい人間が増えれば、社会がよくなり、国がよくなり、世界がよくなっていく⇒平和でよりよい世界の構築
- ◆オリンピックの価値（Olympic Values）
 - 卓越（Excellence）、友情（Friendship）、尊重（Respect）
- ◆オリンピズムの教育的価値
 - ①努力する喜び（Joy of effort）
 - ②フェアプレイ（Fair play）
 - ③他者への尊重（Respect for others）
 - ④卓越さの追求（Pursuit of excellence）
 - ⑤身体、意志、心の調和（Balance between body, will and mind）

資料6

では「オリンピック教育」って何？

国際シンポジウム 2011 (第34回 JOA セッション)

筑波大学附属高校における
オリンピック教育

2011年12月4日 於国立スポーツ科学センター

〈おまけ〉

JOA 設立 35 周年記念 第 36 回 JOA セッション

TOKYO2020 レガシー

クーベルタンの思想と国立競技場からの展望

2013年12月8日(日) 於明治大学駿河台校舎

「第2部 ビエール・ド・クーベルタン生誕150年を記念して」の中で、
「第9回 国際ビエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム参加報告」をします

で話をします。ついでながら、第36回、今年の来週末ですね。このようなタイトルで明治大学の駿河台校舎でありまして、そこでも時間を少しいただいて、この夏行ってきたユースフォーラムの参加報告をします(資料6)。写真にある(p.205, ③)クーベルタンの子孫の方、アントワン・ド・ナバセルさんというのですが、クーベルタン生誕150年記念でこのようなタイトルのシンポジウムがあるので、わざわざフランスから来てくださるということなのですね。興味のある人は、ぜひJOAのホームページを見て、誰でも参加できると思うので、今からでも申し込んでみてください。この翌日、月曜日には、ナバセルさんは私の学校へ来て、体育理論の授業を参観されます。

資料7

「オリンピック教育」とのかかわり

◆2010年9～10月

1) 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム(CORE)設立準備
附属学校の取りまとめ役として関わってほしいとの依頼が、当時の附属
学校教育長・阿部生雄氏からあった

2) 国際ビエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムへの派遣依頼
田原淳子氏(PdC委員会理事)より阿部氏へ打診
「2011年8月に北京で行われる第8回国際ビエール・ド・クーベルタン・ユース
フォーラムに、筑波大学の附属学校から生徒を派遣してもらえないか」
「附属高校からどうだろう…」

↓

いきなり、「オリンピック教育」の当事者になってしまった

ク教育のエキスパートのような言い方をしてくださいましたが、私にとっては、「何で俺がこんな話をしてるんだらう」という感じです。はっきり言って唐突でした。中央大学もそうだろうと思うけれども、大学という組織は、ただ従来やっていたようなことをやっていたらいい時代ではなくっており、特にグローバル教育といえますか、これからの時代に応じた人材を育てていこうということで、いろいろと考えているのです。国立大学法人筑波大学でも、中期目標や中期計画というものを立てて、それに合わせていろいろなプログラムの見直しをしていますが、その中でオリンピック教育というものが、あるときポンと出てきたのです。これは何かというと、これも後で出てくるけれども、筑波大学の前身の東京高等師範学校の校長先生をされていた嘉納治五郎の生誕150周年が2010年で、これに合わせて組織づくりをし、オリンピック教育に力を入れていこうということになったわけです。

実は世界各地に、オリンピック教育研究センターというものがあるのです。例えば、ラフバ

ラ大学、あるいはケルンスポーツ大学。そのようなところにオリンピック教育のセンターがあるのだけれども、いずれも研究するばかり、あるいは、資料を集めたりするばかりのようなのです。筑波大学の素晴らしいところは、附属学校を持つというところで、小・中・高、駒場中・高、坂戸、それに視覚、聴覚、肢体不自由などのいわゆる特別支援教育学校など、全部合わせると11校あります。研究したことを附属で実践できるという環境を持つセンターは世界でただ一つです。これが売りであるということで、当時の附属学校教育長の阿部生雄さん。この人の名は、サッカー部の人は押さえておいてほしい名前の一つだけれども、中央大学と筑波大学のサッカーの定期戦でトロフィーが幾つか出るでしょう。阿部杯というものがあるのを知っている？ 大きくうなずいているけれども、あるね。あれは何なの？ ウチノ杯と小野杯と阿部杯が出るね。

学生 小野は……。

おお、呼び捨てたか。

学生 グラウンドに銅像がある。

グラウンドに銅像がある。なぜ銅像があるの？ まあ、いいです。後で調べておいてください。この阿部生雄さんは、その阿部さんのご子息です。この人のお父さんが、かつて東京教育大学のサッカー部の部長を長くされていて、中央大学の小野さんといろいろと話をする中で、「おい、定期戦をやろうぜ」という話になった。スポーツの歴史の研究者なのだけれども、その先生から、「中塚君、附属学校のオリンピック教育の取りまとめやってよ」と。以前からいろいろとおつきあいさせてもらっていたこともあって、そのようなことになりました。何のことが、僕にはさっぱり分かりませんでしたけど、これがはじまりでした。

それから、ちょうど同じ時期、これもはじめはさっぱり分からなかったけれど、国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムに筑波大学附属高校が出ないかという話が、国士舘大学の田原淳子先生から来ました。その人も初対面だったのだけれども、いろいろと話を聞いてみると、国際ピエール・ド・クーベルタン委員会というものがあるって、その委員会の理事の方のようで、「附属高校からどうだろう」と。そのようなことで、いきなりオリンピック教育の当事者になってしまったというわけです。

とはいっても、例えば皆さん、この中で教員志望の人はどれぐらいいるの？ 何の先生にな

資料8

「オリンピック教育」って何？

- ◆「オリンピック教育」に対する、一般的な教員の反応
「オリンピック選手を育てるためのプログラム？」
「エリートのための教育？」
（「物理オリンピック」等も同様に受け止められている）
「オリンピック招致活動の一環？」
「体育科でやればいいんじゃないの？」
- ◆ユースフォーラムへの参加をめぐって
「ただでさえ忙しいのに、いったい誰が引率するのか？」
「なぜ附属高校がやらなくてはならないの？」
「クーベルタン・スクールにしたら主催する？ それは無理…」
↓
決して、好意的には受け止めてもらえなかった

教育って何だ」と、オリンピックというのは、4年に1回開かれる大きな運動会だろう。それに「教育」がつくということは、一体どのようなことか。

ここまでの話を聞いた皆さんは分かると思うけれども、初めて聞くと何のことか分からないですね。オリンピック選手を育てるプログラムか。なぜそれを筑波大の附属高校がやるのか。エリートのための教育。教育界でエリートというのは、非常にアレルギー反応を起こす人がいるので、非常にやりにくいです。ついでに言うと、物理オリンピックに関わっているような先生もうちの学校にいるのだけれども、物理界でも同じことを思われているようで、物理のエリートを育てるのか。本当はそうではなくて、それにつながる、「物理大好きになってほしいね」というのが物理オリンピックの一番のポイントのようなのですけれども、ごく一部のエリートのための教育のように思われてしまう。

資料9

田原氏にお聞きしたこと①

IOCは「オリンピック教育」に力を入れている

- ◆「国際ピエール・ド・クーベルタン委員会」がある！
- ・「クーベルタンの思想の維持・普及・教育・研究」を目的として1987年設立。会長は Prof. Dr. Norbert Mueller（ドイツ）
 - ・1997年サマランチ IOC 会長（当時）は、すべてのNOCにクーベルタン・スクールの普及促進を提唱
 - ・主な活動は、出版物の発行/シンポジウム等の開催/ IOC 関連会議での発表/国際クーベルタン・ユースフォーラムの開催（1997～）/学術論文に対するクーベルタン賞の授与（2008～）
- ◆「クーベルタン・スクール」が世界各地にある！
- ・世界に約50校（幼稚園、小・中・高校）が加盟（2006年時点）
 - ・ピエール・ド・クーベルタンの教育思想に賛同し、それを学校の教育理念としている学校。ピエール・ド・クーベルタンの名前を持つ学校や国際オリンピック委員会（IOC）の設立と強い結びつきのある学校が含まれる
 - ・高校は、2年に1回、輪番で「ユースフォーラム」を開催している！
（田原氏作成スライドより）

るの？ 英語、社会科。なるほど。教員集団というのは、いろいろなことを教員の会議で決めていくのです。何でもそうかもしれないけれども、あるとき、オリンピック教育をやることになりました。今度ユースフォーラムに生徒を派遣してくれと依頼が来ていますということ、一個人が勝手に連れていくわけにいけないので、教員の会議に諮るわけです。そうすると、このような声が出てくるわけです。「オリンピック

それから、ちょうどこの頃、2016年の方のオリンピック招致をやっているかという声もありました。あるいは、オリンピックは体育科でやればいいじゃないかと、このような感じですが。ましてやユースフォーラムに参加するとなると、ただでさえ忙しいのに、一体誰が引率するのか。引率問題というのは、学校の先生の中でもめることが多いので、先生になる人は、注意しよ

うね、あるいはなぜ附属高校がやらなければいけないのか。

それから、ここが大事です。クーベルタン・スクールになったら、いつかは主催しないとけません。物理もそう、化学もそう、オリンピックとつくプログラムは他にもいろいろとあるけれども、長いこと日本が参加しなかったのは、参加してしまうと、いつか主催しなければいけないから、非常にお金がかかります。そのためのバックボーンはありません。特に民主党の政権時に、いろいろとカットされたね。

そのような背景の中で、なかなか大変だと、好意的には受け止めてもらうことができなかったということです。

ちょうどその頃、田原さんからいろいろと聞きました。IOCは、オリンピック教育に力を入れているのだ、委員会があるのだと。詳しいことは省略しますが、とにかくあるのだということ。クーベルタン・スクールというのが、世界各地にあるのだと。高校の年代だけでも、世界に30校と言ったかな、そのようなものがあって、2年に1回クーベルタン・スクールが集まって国際フォーラムをやっている。そのようなことは、僕も全然知らなかったのです。正式に加盟すると、生徒7名、教員1名、オブザーバーとして参加する場合は、生徒2名、教員1名の引率。参加者の滞在費は、クーベルタン委員会が持って

資料 10

田原氏にお聞きしたこと②

「国際 PdC ユースフォーラム」というものがある

【目的】若い人々がクーベルタンの思想を感じとって、それを実践に移し、将来、自分の国でオリンピック・クーベルタンのムーブメントを形づくる力を養う

【対象】クーベルタン・スクールズ・ネットワークに加盟する高校

- ・正式加盟校：生徒7名、引率教師1名
- ・オブザーバー参加：生徒2名、引率教師1名

【開催場所・頻度・期間】加盟校が当番校となり隔年開催。1週間

【内容】プログラムに参加し、以下の5種目で一定の基準に達すると、クーベルタンメダルが授与される。

- ①知識テスト（オリンピック関連）、②スポーツ競技（陸上競技、水泳）
- ③社会活動（校長による活動の証明書）、④芸術パフォーマンス
- ⑤グループ・ディスカッション（オリンピックズ）（田原氏作成スライドより）

資料 11

田原氏にお聞きしたこと③

北京大会ではぜひ筑波大（附属）に！

◆これまでのユースフォーラム

- 第1回 1997年 ル・アーブル（フランス）
- 第2回 1999年 マッチ・ウエンロック（イギリス）
- 第3回 2001年 ローザンヌ（スイス）
- 第4回 2003年 アレンツァーノ（イタリア）
- 第5回 2005年 ラートシュタット（オーストリア）
- 第6回 2007年 ターボル（チェコ共和国）

…田原氏初参加。日本に紹介

- 第7回 2009年 オリンピア、パリニ（ギリシア）

…日本初参加（都立国際高校）

- 第8回 2011年 北京（中国）予定

…アジア初開催。五輪との縁が深い筑波大に！

資料 12

筑波大附高の参加まで① 合意形成

◆「オリンピック教育」に対する、教員の反応

- 「オリンピック教育って何？」
- ・オリンピック選手を育てるためのプログラム？
 - ・エリートのための教育？
- （「物理オリンピック」等も同様に受け止められている）
- ・オリンピック招致活動の一環？

◆ユースフォーラムへの参加をめぐる：会議にて

- 「ただでさえ忙しいのに、いったい誰が引率するの？」
- 「なぜ附属高校がやらなくてはならないの？」
- 「クーベルタン・スクールになったら主催する？ それは無理…」

↓

今回は、あくまでもオブザーバーとして、オリンピック教育がどのように為されているのかを見てくるのがねらい。引率は中塚

資料 13

筑波大附高の参加まで② 募集と選考

- ◆全校生徒へ告知・募集開始（2011年4月11日）
「北京で、世界の高校生と、オリンピックについて語りませんか？」
(資料参照)
 - ・オリンピックのねらいと、フォーラムについて
 - ・ユースフォーラムの概要と条件、募集の手順
- ◆7名の男女がエントリー。2名を選考
 - ・多くの生徒に国際交流事業を経験させたい
 - ・この事業にふさわしい生徒を派遣したい

↓

 レポート、面接等を経て2名を選考（4月末）

資料 14

筑波大附高の参加まで③ 課題確認

- ◆ユースフォーラムの課題＝クーベルタン賞とは…
 - 1) Community Service
…地域貢献活動を事前に行い、校長先生の承認を得る
 - 2) Olympic Knowledge Test
…オリンピック運動に関する、15分程度の小テスト
 - 3) Sports Tests
…Taichi, Cross-Country, 75m, Long Jump, Swimming
 - 4) Arts Performance Award
…7分以内のパフォーマンス
 - 5) Olympic Values
…3つのテーマでのグループ・ディスカッション

資料 15

筑波大附高の参加まで④準備

- ◆7月9日説明会時点で…
 1. しておかなければならないこと
 - 1) コミュニティ・サービス（ボランティア活動）
 - 2) 学校紹介（5分以内）の準備
 - 3) アート・パフォーマンス（7分間）の準備
 - 4) レポートの作成（Empowerment Through Sport）
 2. しておいた方がよいこと
 - 1) オリンピック運動やオリンピズム、クーベルタンについての学習
 - 2) 太極拳の練習
 - 3) お土産の準備
 - 4) いまの日本の現状を理解し、伝えるための準備
 - 5) 日本の（本校の）歴史・文化を学び、伝えるための準備
- ◆夏季休暇中の準備会
7月21日（木）、7月25日（月）、8月4日（木）に集まって準備・買い出し等

くれる。メイン・スポンサーは、IOCです。国際オリンピック委員会が、4年に一度の競技会で得られた収益をそのようなところに投資してくれているわけですね。

97年からやっています。1回めはフランスで、そして、2回め。ほら、出てきた、マッチ・ウェンロック。そのあと2年に1回このようなところでやって、ターボルで開かれた大会に日本人として田原さんが初めて参加し、日本に紹介。オリンピックでの大会は、日本から初めて東京都立国際高校が参加しました。これはオリンピック招致と完全に関係しています。2016年の方ですね。このようなものがあるから日本から参加しないかということ、田原さんは、東京都にまず話したのです。オリンピック招致活動をやっていたから。そうしたら、それに乗ってくれるのは国際高校だろうということで、そこから2名の生徒が参加した。2011年のときも国際高校という話もあったのだけれども、「国際理解教育はするけど、オリンピック教育まではちょっとね」という話だったのです。ちょ

うどその頃、筑波大学でこのような取り組みが始まったので、うちの学校に話が来たということです。

筑波大附高の参加まで、①合意形成。会議での結論は、今回はあくまでもオブザーバーとして、オリンピック教育がどのようになされているのかを見てくるのが狙い。引率は私です。

他の先生に被害が及ぶことはありませんのでという持っていき方になりました。

- ② 募集と選考. 全校生徒に「こういうのをやるよ」という話をして、そして、選考します。
- ③ 課題の確認. クーベルタン賞を獲得する活動がメインです。その中身は、課題の確認のライドにあるようなことです。事前にボランティア活動をやって、校長先生のお墨付きをもらってくる。オリンピックの知識テスト、それから、スポーツテスト。このときは中国でやったので、タイチというのは分かりますか。太極拳ですね。それから、クロスカントリー、75m走、ロングジャンプ、スイミング、アート・パフォーマンス。これは自分たちの国の文化、特に運動文化を7分以内のパフォーマンスで表現しよう。そしてオリンピック・バリュースについてのグループディスカッション。

高校時代に国際交流プログラムを体験した人があるかもしれないけれども、ただ行くだけではなくて、やはり事前の準備が非常に大事で、課題以外にもこのようなことをしておかなければなりません。例えばお土産の準備。これは意外と大事なのです。よその国の人たち、特にヨーロッパは陸続きなこともあって、しょっちゅう国際交流をしているのでしょ。彼らは気の利いた小物、学校名が入っているようなものを用意しているのです。うちの学校も何回かそのようなことに関わりながら、徐々に整えているところです。

第8回 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（北京大会）の実際

2011年、8月の13日から21日まで行ってきました。東京都で高校サッカーをやっていた人は、どれぐらいいますか。ああ、やっていましたか。

この時期は、ちょうど大会の時期ですね。お正月の高校選手権の予選を、東京都ではこのような時期からやっているわけです。強いところは冬の選手権だけれども、弱いところは、夏の選手権なわけです。私は、このとき教員生活ではじめて、高校3年生にとってのラストの大会に帯同できませんでした。サッカー部員には申し訳ないし、残念なことです。しかし、顧問がいなくて伸び伸びプレーした彼らは、22年ぶりの本大会出場。地区予選を突破して行ってくれました。顧問がない方がいいのでしょね。

このような国が参加しました（資料16）。主催校是北京四中。時間のあるときに北京市内をぶらぶらしたら、北京百何十中学というのがあった中での四中だから、北京市の中でも恐らく歴史と伝統のある学校です。国際部という組織を持っていて、海外からしょっちゅういろいろなお客さんを招き入れるような仕組みになっていました。アジアで唯一のクーベルタン・スクールが北京四中で、北京オリンピックのときに、北京市から「オリンピック教育をちゃんと

資料 16

第8回国際ピエール・ド・クーベルタン・ ユースフォーラムの実際

【期日】2011年8月13日(土)～21日(日)

※8/13am9:25羽田発～8/21pm8:15羽田着

【会場・主催校】北京第四中学校

※アジアで唯一のクーベルタンスクール

【参加国】オーストラリア、オーストリア(2校)、中国、チェコ、エストニア、ドイツ(2校)、イギリス、ギリシャ、イタリア、メキシコ、ノルウェー、スロバキア、チュニジア(ここまではクーベルタンスクール。各校7名)

コンゴ、キプロス、日本、ケニア、モリシャス、マレーシア

(斜体下線はオブザーバースクール。各校2名)

※参加生徒117名、引率教員22名、スタッフ約20名、

ボランティア(北京四中)約70名

【本校からの参加】生徒：山西優香(3-1)、星野慧(2-6)

引率教諭：中塚義美(保健体育科)

やろうよ」ということで始まったようです。

ここからは、その北京のようすです(資料17)。これは、何をしていますか(資料17①)。朝、われわれがラジオ体操をやるような感じで太極拳をやっています。これはクーベルタン賞のプログラムの一つで、事前にインターネットで、北京

四中の体育の先生が紹介する太極拳の動画が配信され、それを見ながら事前に練習してきたものを朝のセッションで確認しながらやっているところです。テストがあるのでみな真剣にやっています。

オリンピズムの講義。先ほどのナバセルさんからクーベルタンについての講義や、中国のスポーツについての話もありました。全部英語です。グループディスカッション、それから、学校紹介。このときうちの生徒たちは、セーラー服です。私はなぜかサッカーのユニフォームですけども、ちょうどうちの学校の120周年の「120」とついているシャツを着て、うちも歴史と伝統があるのだということ、ささやかながらアピールしております(資料17④)。

これは、全部学校の施設ですね(資料17⑤)。空気は汚いのですが、施設はりっぱです。この右下が、太極拳のテスト。こちら側に北京四中の体育の先生がいて、できている、できていないということをチェックするような感じです。

それから、知識テスト、グループ討議。知識テストのある1面がこのような感じですが、本当に驚きなのですけれども、ゼウス、あるいはヘラクレスなど、ギリシャの神様の名前を答える問題や、右上はギリシャのペロポネソス半島のようなようすです。オリンピアのあった場所や、あるいは古代ギリシャで行われていた競技の種類など、このようなことを知っておかないと、クーベルタン賞が与えられない仕組みになっている。確かにヨーロッパの人にとって、ギリシャの神話や歴史を勉強することは意味のあることかもしれないけれども、僕たちからすると、それよりも、やはり八咫鳥(やたがらす)や、日本武尊や大国主命など、日本の神様の勉強をもっとした方がいいのと思うし、中国には中国の神様の話があると思うのですが、ここでのオリンピック教育は、明らかにヨーロッパ寄りでした。

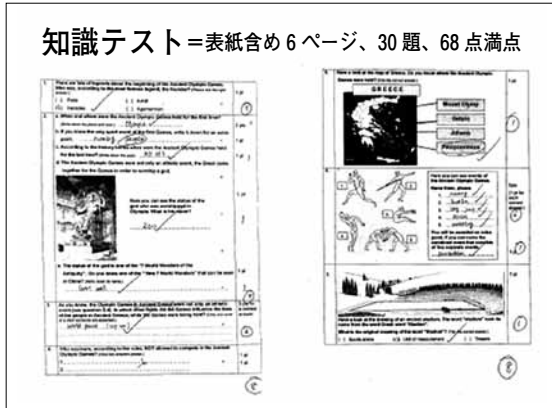
教師の緊急ミーティングもありました。「重大な話だ」と。北京四中の校長先生からクレームがあった。リスペクト。ここでオリンピズムのキーワードが、教師のミーティングでも出て

資料 17



くるわけです。男女のフロアは、行き来すべからず。ヨーロッパの人たちは、かつてに行き来する文化があるけれども、ここは中国なのだ。学生寮のようなところに泊まったのだけれども、1階は男子、2階は女子となっているのですが、そもそもこのように分けることが、ヨーロッパの人たちになじまないようで、平気で行き来していたわけですね。それで四中の校長先生から、「何だ、この集団は」と。寮内での喫煙については、教師もやめてくれという話。

資料 18



ペットボトルを飲んだらポイ捨てばかりしている。だめだと、門限破り。このような話をしながら、左の写真のヘレンさんというオーストラリアの先生が、非常に怖いのですが、ガツンと高校生たちに言っていました（資料19①）。世界中から集まってきた高校生は、このようなところでおばちゃん先生に怒られるとは思っていなかったと思うけれども、オリンピズムを前面に

出しながらの熱いメッセージでした。

もちろんお楽しみもたくさんあって、ダンスパーティー、みんなダンスしますね（資料19②）。それから、その次の日にはクロスカントリー（資料19③）。実は日本のうちの高校生が、女子の部で優勝する。普通の高校生です、普通の。やはり日本の体育のレベルは高いなということ、このようなところへ行って思いました。ちなみに走り幅跳びは、みんな下手ですね。日本人は、それなりに上手に、そつなく跳ぶけれども、ミニエキスポという形で、各国テーブルを一つ用意して、それぞれの国の文化を紹介するというものもありました（資料19④）。

最後にクロージング・セレモニーで、無事、めでたくクーベルタン・アワードを彼女たちはゲットした（資料19⑥）。このような国際交流の集いでは、参加賞のような感じでみんなにアワードをあげたりすることが多いけど、エクセレンス、一所懸命頑張って卓越性を求めなければいけないわけです。ざっと見たところ、3割ぐらいの高校生がもらえなかったですね。何か

資料 19

① 4 日目 (8 / 16) 午後：教師の緊急 MTG

「重大な話。北京四中の校長先生からクレームがあった!!! スベクト!!!」
 ×男女の更衣室の行き来
 ×案内での喫煙(数箇所)
 ×ペットボトルの放置
 ×門限破り...

② 4 日目 (8 / 16) 夕食後：国際ダンスパーティー

Additional text or notes related to the events in the photo collage, including details about the dance party and the award ceremony.



の事情でプログラムに全部参加できなかった人や、パフォーマンスがよくなかった人などです。けっこうシビアでしょ。

第8回大会 (2011年度・北京) に参加して感じたこと

2011年に参加して、ある程度オリンピック教育で求められているものが理解できました。それはまずクーベルタン賞を通して、それから、プログラム全体を通して、各国の状況はある程度わかりました。そして、日本でできること、やっていることは、実は多々あるぞということを感じました。オリンピック教育と改めて言う必要があるのだろうかと感じたのが、このときです。

そして、改めて思いました。日本の学校体育は、世界に誇れるのだと。皆さんにとっては当たり前だと思いますが、小学校1年生から高校3年生まで、週何回かの体育の授業が必修で保障されています。そして、体育の授業を通して、実にさまざまなスポーツを経験できる。しかも学校の中に施設がある。このような国はないですね。非常に恵まれています。ちなみに中央

資料 20

国際 PdC ユースフォーラムに参加して (2011)

- ◆「オリンピック教育」で求められているものが、ある程度理解できた
 - 1) クーベルタン賞を通して
 - 各項目がクーベルタンの思想を反映→「オリンピック教育」の内容
 - 2) プログラム全体を通して
 - ・異文化理解と国際交流→国際平和への貢献につながる
 - ・様々な活動の中で印象付けられる「オリビズム」
 - 例) クロスカントリーでの支え合い・助け合いを賞賛
 - 例) マナーに関する指導の中で「異文化をリスペクトせよ」との言葉
 - 例) クーベルタン賞は全員に授与されるわけではない!
- ◆各国の状況が、ある程度わかった
 - ・現状は、ヨーロッパ主導で「オリンピック教育」が展開されている
 - ・日本でできること、やっていることが多々ある→日本からの情報発信
 - ※「オリンピック教育」と、改めて称する必要があるのか?

資料 21

世界に誇れる日本の学校体育
—「オリンピック教育」実践の場—

- ◆12年間の「体育実技」が保障されている!
 - ・すべての児童・生徒が、学校で、定期的に運動する機会が設けられている
 - ・すべての児童・生徒が、さまざまなスポーツを経験できる
- ◆学校の中でさまざまなスポーツイベントがある!
 - ・運動会がある。学校主催の野外行事がある(林間学校、臨海学校)
- ◆部活動が、より専門的な活動の機会を提供している
 - ・放課後すぐに活動できる。学校教育活動なので保護者は安心
- ◆全国的な競技会が整備され、注目されている
 - ・高校生の競技会に、多くの観衆が集まりメディアが注目する
- ◆卒業生のつながりや地域社会の誇りとなっている
 - ・学校運動部や学校行事が、卒業生のきずなを深める
 - ・学校運動部の活躍が、地域社会の誇りとして認識されている(例:高校野球)

大学は、何年生まで体育は必修ですか。

ああ、そうなの。その場合は、13年間の体育実技ということになるのかな。今、私はちょうど高校3年生の担任を持っていて、高3の授業もそろそろ終わるのですが、「おまえたち、そろそろ12年間の体育の集大成だぞ」「1分1秒たりともおろそかにすることなく、集中して臨め」というような感じでやっているのですけれども、13年め、14年めもあるといいですね。

また、学校の中でさまざまなスポーツイベントがあるのもすごいことですね。あまり考えたことがないでしょう。運動会があつて、あるいは、学校主催の野外行事、臨海学校や林間学校などがあつて、これはやはり大変なことです。

ちなみに臨海学校の始まりは、20世

紀初頭の東京高等師範ですね。嘉納治五郎の下ではじまります。日本は、四方を海に囲まれている。国民全てが泳げるようになるべきであるという嘉納治五郎の方針もあつて、しっかり水泳の授業と臨海学校をやろうと。当時の東京高師の人たちは、体育の学部生だけではなく、全ての学部の人が2週間の臨海学校に必ず行かなければいけない。その人たちが全国各地の学校に赴任して、ほぼ全ての学校にプールを造って水泳の授業をやり、体育施設を造って体育の授業を必修で行い、あるいは運動会をはじめていくのです。そのような意味では、東京高師が日本の学校体育の出発点ですね。

部活動も優れたシステムです。学校の施設を使って、放課後すぐに活動できる。学校教育活動なので、保護者も安心。欧米の地域スポーツクラブももちろん非常に優れたシステムで、生涯スポーツの場として日本がこれからやっていかなければいけないことだけれども、青少年のスポーツの場としての学校の部活動も、捨てたものではないということです。また、全国的な競技会が整備され、注目されている。たかが高校生の大会に、あれほど注目してくれる。そし

て、卒業生のつながりや地域社会の誇りとなっている。これは、実は驚くべきことなわけです。

そのような視点で筑波大学附属高校でやっていることを見直してみると、例えばいつもやっている体育実技の授業は、体力向上や技能習得だけではなく、いろんなことを学ばせているわけです（資料22）。例えばサッカー単元。私の授業では「するスポーツ」「見るスポーツ」の両面からサッカーを取り上げますが、オフサイドというルールは男子にも女子もしっかりと、その精神も含めて伝えます。試合中は相手と味方、OUR SIDE と OTHER SIDE に分かれてゲームをやっている。それぞれのサイドからオフしたらずるいというような考え方からスタートし、二つのチームが徹底的に戦うわけです。しかし終わったら、相手と味方を分けていたサイドはなくなります。ノーサイドですね。ラグビーでノーサイドという言葉がよく使われるけれども、もちろんサッカーでも同じ。そして、友達になるわけです。中央大学と筑波大学は、定期戦を通して毎年友達になっているわけです。試合後には握手。この他にも「自由と責任」といったテーマをサッカー単元で取り上げ、そのようなテーマを授業の中でやっています。これ

資料 22

<p style="text-align: center;">筑波大学附属高校の実践① 「体育実技」の授業の中で</p> <p>◆体育実技のねらいは、体力向上や技能習得だけではない！ ↓ 1) 身体教育…発達刺激としての運動の実践 ↓ 2) 運動・スポーツを通しての教育…スポーツ手段論 ↓ 3) スポーツそのものの教育…スポーツ目的論</p> <p>◆1～2年次の必修単元で、様々なスポーツの基礎・基本を学ぶ サッカー単元では「するスポーツ」「見るスポーツ」の両面から 例)「オフサイド」と「ノーサイド」の学習→試合後には握手 例)「サッカーにおける自由と責任」「世界サッカー史をさぐる」</p> <p>◆3年次の選択制男女共習単元で、 「ささえる」ことの楽しさや大切さを学ぶ 男女が共に楽しめるようにルールを工夫 イベントを企画・運営（ささえる楽しさ） →これらはオリビズムの教育にもつながる！</p>	<p style="text-align: center;">筑波大学附属高校の実践② 「体育理論」の授業の中で</p> <p>◆新しい教育課程では「各学年6時間」の体育理論が必修に 1年次→スポーツの歴史・文化的特性や現代のスポーツの特徴 2年次→運動やスポーツの効果的な学習の仕方 3年次→豊かなスポーツライフの設計の仕方</p> <p>◆本校では、「体育理論」を通年で学習。密度の濃いスポーツ教育</p> <p>◆中塚の授業では、オリンピックに関連して次のようなことを学ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近代オリンピックの誕生とクーベルタンの思想 ・日本におけるスポーツの発展過程－嘉納治五郎と東京高等師範学校の功績 ・オリンピックとアマチュアリズム/プロフェッショナリズム ・スポーツと政治・経済・メディア etc <p style="text-align: center;">↓</p> <p>※「オリビズム」は歴史学習の中で取り上げる（特に嘉納治五郎） ※「メガイベントとしてのオリンピックや FIFA ワールドカップ」を題材に、今日のスポーツの広がり、他の諸領域との関係を学ぶ。</p>
<p style="text-align: center;">附属高校の実践③ 3年次の総合学習（選択） 「オリンピックと教育・スポーツ」</p> <p>◆3年次の自由選択枠で開講 2011年度は5名で開講。その後は希望者少なく開講できず。 (2004、2006年度開講の「現代社会とスポーツ」の流れを汲む)</p> <p>◆主な学習内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体育・スポーツに関する自由課題のレポート作成と発表 ・体育・スポーツに関する講義（特に「歴史」や「人物」の学習） 例) 古代～近代オリンピックの歴史 例) 嘉納治五郎&クーベルタンの人物像と功績 ・博物館等を訪問しての学習 講道館、秩父宮記念スポーツ博物館、日本サッカーミュージアム、 野球体育博物館、JIS&NTC（ナショナル・トレーニングセンター） ・テーマを絞ってのディスカッション <p style="text-align: center;">↓</p> <p>希望者を対象に、質の高い、濃密な「オリンピック教育」ができた</p>	<p style="text-align: center;">筑波大学附属高校の実践④ 学校行事・部活動などの中で</p> <p>◆学校行事の中で</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ大会（運動会の一形式） ・対学習院総合定期戦（部活動の対抗戦） <p>◆部活動の中で</p> <ul style="list-style-type: none"> ・放課後の部活動 ・昼休みに運営される各部主催のスポーツイベント 例) 蹴球部主催のフットサル大会 例) テニス部、バレー部も同様に… ・卒業生も含んだ多世代型クラブとしての活動（「桐陰会」の名残） 例) 蹴球部のチャリティマッチ <p style="text-align: center;">↓</p> <p>これらすべてが、「オリンピック教育」であると言える！</p>

は完全にオリンピック教育と言えるでしょう。

あるいは、体育理論の授業。君たちはもう高校を卒業しているけれども、今の高校1年生から取り入れられた学習指導要領では、各学年6時間の体育理論、教室でやる授業が必修になって、ここに挙げているような中身をやらなければいけないことになっています。現場の先生は、みんな苦労しています。実技しかしてこなかった人が先生になっているから。しかし、これは非常に大事なことで、うちの学校では半世紀にもわたってこれを通年でやっていて、私の授業でも、ここに挙げているようなテーマで授業をやっていきます。2月はじめに、クーベルタン家の末裔のナバセルさんが、本校にやってきて、私が担当する体育理論の授業を参観されることになっています。そこでは日本のスポーツの発展過程と題して、嘉納治五郎と東京高師の功績について話をしようと考えています。というように、体育理論の授業の中でも、実はすでにたっぷりオリンピック教育をやっているのです。

それから、3年生の選択の授業なので、希望者がいなければ開講されませんが、総合的な学習の中で「オリンピックと教育・スポーツ」という講座が開講されるときもある。そして何とんでも、学校行事、部活動の中でやっているわけです。これら全てが、オリンピック教育であると言えるということです。

少し余談になるけれども、私が顧問を務める筑波大学附属高校蹴球部は、面白い取り組みをしています。これからの学校運動部のモデルとして、いろいろところで紹介しています。11人制の競技志向の集団がサッカー部です。日本サッカー協会初代会長もこの学校の卒業生というぐらい、高等師範とともに高等師範附属が、日本のサッカーの原点にかなり貢献しています。ちなみに中央大学サッカー部80年史を中心的に編集した方も、うちの卒業生ですね。女の子で、サッカーをやりたい、ボールを蹴りたいという子があるとき5人だけ入部して活動を始めました。そして、その子たちが1年間やったら、後輩が入ってきて10人になって、フットサルができるようになって、今や各学年10人ぐらいずつでフットサルをやっています。それから、バリバリのサッカーは嫌だけれども、お楽しみ感覚でフットサルを楽しみたいという人たちが、ここから分かれた形でフットサルのネットワークを作っています。

三つの部門、つまりチームが集まって一つのクラブを構成しています。毎週、金曜日の昼休みにクラブ会を開いて、それぞれの活動報告と、自分たちが何ができるかという話をしています。校内フットサル大会のようなものを企画しているのね。文化祭では、今年は3部門合同でダンスのパフォーマンスをやって、文化祭のグランプリ・演示部門第2位という、よく分からないけれども、そのようなものを獲得していました。

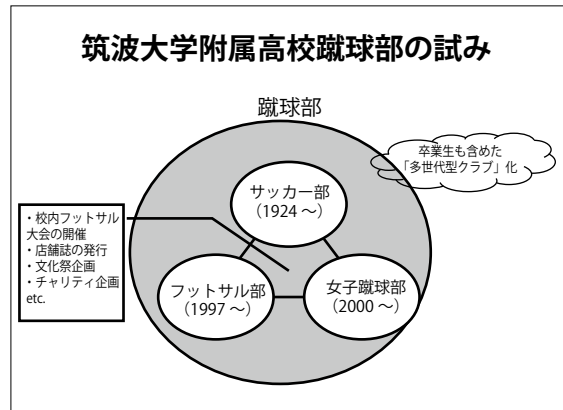
何とんでも引退がないのです。卒業生も、年代ごとにチームを作って、やっています。定年

を過ぎた人たちも。この人たちは、金はある、暇はある、権力はあるということで、週2～3回、芝生のグラウンドでフットボールを楽しみ、フットボール後の食事を楽しみ、そして、神戸一中や湘南中の卒業生たちと一緒に連合軍を作って海外へ遠征し、アイントラハト・フランクフルトのおじさんチームと試合をやったなど、極めて豊かな生涯スポーツライフをここでやっています。

フットサルも今、いろいろな大会をやっています。フットサル部の中で少しずつ志向が分かれているような感じもあります。女子蹴球部も協会主催の公認フットサル大会に出場します。合宿は三部門合同で行います。TFC杯というのは、昼休みに年2回、蹴球部、つまり三部門が主催で、誰もが参加できる校内フットサル大会です。ワールドカップ方式でやります。今年の6月の大会の決勝戦はティーチャーズ対高校3年生のあるクラスでした。ティーチャーズはもちろんわれわれね。教師もチームを作って、これに参加する。11月の大会は、ティーチャーズは編成されませんでした。各クラスに吸収されて、私は担任をしている3年6組というチームで出ただけけれども、1次リーグ2連敗で、あえなく敗退。このような遊びを企画して、いろいろとやるわけです。

OBと現役のつながりも濃いものがあります。2004年の創部80周年の際にはOBからシェルト板を寄贈していただきました。震災後は、毎年「チャリティー・フットボール・フェスタ」と称するイベントを実施し、OBもみんな集まってきて、ボールを蹴って募金します。2012年は、南三陸町立歌津中をご招待しました。豊島区の市民団体と協力して実施したのですが、これには、中央大学卒業生の岸卓巨君も大きく関わっています。サッカーの競技ももちろん大事だけれども、プラス、スポーツの広がり、仲








資料 23



資料 24



資料 25

<p style="text-align: center;">Our School is...</p> <ul style="list-style-type: none"> • founded in 1888 • located in Tokyo • affiliated to the University of TSUKUBA <p>Our school motto is Autonomy, Independence and Freedom</p>  	<p style="text-align: center;">About our school</p> <ul style="list-style-type: none"> • School year starts in April. • We go to school from Monday to Friday and study from 8 a.m to 3 p.m. • After school, many students play sports in the school. <p>Our school is <i>"The birth place of School Sports"</i>.</p>   
<p style="text-align: center;">Who is Jigoro Kano?</p> <ul style="list-style-type: none"> • Founder of JUDO • Pioneer of international exchange through sports • The first Asian member of the IOC (in 1909) • Founder of Japan Sports Association (in 1911) • Educator: the principal of our school (1893~1920) <p>He did so many things for sports and education in Japan, and his policy was the same as the OLYMPISM.</p> <p>精力善用 "Maximum Efficiency of Energy Use" 自他共栄 "Mutual Welfare and Benefit"</p> <p style="text-align: center;">We are very proud of him.</p> 	<p style="text-align: center;">Japanese School Sports</p> <ul style="list-style-type: none"> • Every students have an experience to play various types of sports through PE class. • After school, we can take part in various sports club activities called BUKATSU DO in the school facilities. • There are various high school sports tournaments in Japan. Baseball and soccer tournaments, which have over 90 years history, have become national events and a center of public attentions. • Inter High School Tournament is the biggest annual competition for high school students which is like an Olympic Games. 

間の広がりのようなものも含めたゆたかなスポーツライフを楽しむことはとても大事なことで、これもまたオリンピック教育、スポーツ教育だと言えるでしょう。

ここからの数枚のスライドは何かというと、クーベルタンのユースフォーラムに行ったときに、「あなたの学校は何なの」と言われたときの説明用に作ったものです（資料25）。1888年にできて、東京にある。University of Tsukuba Senior High School などといっても、東京がどこにも出てこないの、一応これを言っておかないと分からない。われわれのモットーは、自主、自律、自由です。そして、われわれの学校は、4月に始まる。月曜から金曜まで授業をやっていて、8時から3時までやっている。アフタースクールでスポーツをやっている。「The birth place of school sports」とまで言い切ってしまうております。

なぜそうなのかは、この人なのです。先ほどからちらちらと名前が出てくるけれども、嘉納治五郎という名前を聞いたことがある人は、どれぐらいいますか。初めて聞いた人は？ ああ、そう。中央大学サッカー部。柔道は、誰が作ったのですか。

そうです。さまざまあったマーシャル・アーツとしての柔術のいいところを組み合わせ、柔道、特に教育的なものとして整理し直したのがこの人で、国際教育プログラムの先駆者でもありました。中国から多くの留学生を受け入れた。当時、清が崩壊しかかっているようなときで、中国の人たちも「このままではいけない」と志の高い人たちは思い、日本にたくさん勉強に来ていたわけですね。そのような人たちを7,000人も8,000人も受け入れる日本の受け皿を作ったのが、この人です。

そして、アジアで最初の IOC メンバーです。オリンピック・ムーブメントがヨーロッパから始まって、全世界に広げよう、アジアにもといったときに、20世紀の初頭、右肩上がり世界にどんどんのし上がっていたのが日本です。日露戦争が終わったのが1905年。恐らくヨーロッパの人には、あの大国ロシアを破った極東の島国日本ということが、非常に意識としてあったのではないかと思います。ですから、オリンピック運動を広げよう、アジアから委員を、となったときにぜひ日本からとなり、日本人であれば嘉納治五郎となるわけです。1912年のストックホルムオリンピックに選手団を派遣してくれとの要請にこたえて、選手団を派遣するための組織を作ったのです。それが1911年の、Japan Sports Association と書いているけれども、今の日本体育協会ですね。いろいろなスポーツの総元締めを作ったのが、やはり嘉納さん。

そして、この人は、何と言っても教育者なのです。The principal of our school, 筑波大学附属の校長先生をやっていたのです。もう少し正確に言うと、東京高等師範の校長をされていて、その校長は、附属の校長も兼ねていたのです。この人がいた頃に、日本の学校体育のベースとなるようなことをまずは附属でためし、そして高等師範でやり、全国に赴任していった卒業生が広めていくのです。先ほども言ったように、全国各地に運動会や水泳の授業のある学校ができ、そして、例えばサッカーというスポーツが全国各地に広がっていくわけです。

そのようなルーツにある嘉納治五郎の考えは、例えば「精力善用・自他共栄」という言葉で表されます。ここでは詳しくは説明しませんが、この考えは、クーベルタンが言っていることと同じなのです。つまり、洋の東西、距離は遠く離れているけれども、ほぼ同じような時期に同じようなことを考えていた人が、われわれの国にいるのだということです。だからわれわれの国は、学校体育が非常に充実している。青少年の教育にス

資料 26

まとめ (2011 年度)

- ◆現状でも「オリンピック教育」は、様々な場面で為されている！
→あえて「オリンピック教育」を唱える意味・意義を考えたい

- ◆為されているが、「歴史」や「理念」についての教育は不十分！
→近代スポーツ導入期における先駆者の思想と功績、
特に、嘉納治五郎の遺産についての学習が必要！

学校スポーツのルーツは、明治期の東京高等師範学校にある。その附属学校としての歴史教育が重要。とりわけ嘉納治五郎の思想と功績については欠かせない！

↓
もっとできることがある。実践し、発信していきたい

↓
「ヨーロッパ中心のオリンピック教育」から、
ローカルを加味したグローバル (GLOKAL) な「オリンピック教育」へ

スポーツをとということの、言ってみたら先進国なわけです。2011年度のまとめとして、オリンピック教育がさまざまな場面でなされている。なされているけれども、少しこの辺が欠けている。歴史や理念についてが不十分だな、特に嘉納治五郎の遺産について、もっとやらなければということを感じました。

第9回大会（2013年度ノルウェー・リレハンメル大会）の様子

さて、ここからノルウェー大会の話になります。一気に行ってしましましょうか。

今年の夏、第9回のノルウェー大会。国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムに、またまたうちの学校は呼んでもらいました。前回参加した高校生が、非常によく頑張ったのですね。そして、主催のクーベルタン委員会の人たちも、日本の筑波大学附属高校からぜひ、引率も中塚先生という感じで。そのような流れの中で、またまた高校サッカーの真っ盛りの時期ではありますが、2年前、僕がいなかったときに彼らは都大会に進出できているし、顧問がいない方がいいかもしれないということもあって、行ってまいりました。

ただ、非常に遠いです。ノルウェーというのは、片道、いろいろと合わせて、こちらから向こうへ行くのに15時間ぐらいです。直行便はないので、成田からコペンハーゲンへ行って、そこで乗り換えてオスロへ。本当はその日のうちに、リレハンメルに行きたかったけれども、遅くなってしまったので、翌日に行くことにしました。先に言っておくと、注に書いてありますね。飛行機の遅れにより、予定より帰国が1日延びた。帰りもやはりオスロ-コペンハーゲン-成田だったのですが、スカンジナビア航空の不手際でオスロ-コペンハーゲンが遅れ、次の飛行機に乗れなくて。ただ、ホテル・食事代は全部スカンジナビア航空持ちでもう1泊し、思わぬコペンハーゲンの半日休暇を楽しむことができたのですが、海外初旅行だった高校生にとっては、「私は大丈夫だろうか」と、最初は心配顔でしたね。

主会場は、リレハンメル。1994年の冬のオリンピックの会場で、行ってみて分かったのですが、主催校のガウスダルの学校というのは、リレハンメルからバスで30分ぐらい移動したところでした。そこをいろいろと行き来しながら、活動を展開しました。17か国19校、参加生徒100名、スタッフ20名、ボランティア30名。主なプログラムは、先ほどとほぼ同じですが、ノルウェーの自然や文化に親しむ活動。このようなものが、非常に印象に残りました。

このスライドは、皆さんの資料に入っているかな（資料27）。参加校。少し字が小さいですけど、ずらずらとABC順に並んでいます。一番上を注目してもらいたい。オーストラリアは、Winners of the Australian Coubertin Award。これは、学校名ではないですね。どう

資料 27

<p style="text-align: center;">第9回 ノルウェー大会の概要</p> <p>【期日】2013年8月10日(土)～18日(日) ※8/9am11:40 成田発～8/20am9:30 成田着 (約15時間のフライト) 注) 飛行機の遅れにより、予定より帰国が1日遅れた 【会場】主会場: リレハンメル (1994 冬季五輪会場) 主催校: Gausdal videregående skole-Pierre de Coubertin 【参加国】オーストラリア、オーストリア (2校)、中国、チェコ、エストニア、ドイツ (2校)、イギリス、ギリシャ、イタリア、ノルウェー、ロシア、スロバキア (ここまでがクーベルタンスクール。各校7名) <u>キプロス、日本 (筑波大附高)、ケニア、モーリシャス、マレーシア</u> (斜体下線はオブザーバースクール。各校2名) ※17か国19校。参加生徒100名、スタッフ20名、ボランティア30名余 【本校からの参加】生徒: 皆川有子 (3-2)、加納時定 (2-5) 引率教諭: 中塚義実 (保健体育科)</p>	<p style="text-align: center;">主なプログラム</p> <p>◆クーベルタン賞に関する活動◆ 1) 知識テスト…オリンピック、オリンピズムについての講義とテスト 2) スポーツテスト…必修:オリエンテーリングとクロスカントリー 選択: 100m 走・走幅跳・砲丸投・水泳から3種目 3) 社会貢献活動…事前に行う、地域のボランティア活動 4) アートパフォーマンス…7分以内のパフォーマンス 5) グループ・ディスカッション…オリンピズムについての討論</p> <p>◆ノルウェーの自然や文化に親しむ活動◆ 1) ノルウェーの自然や文化…国立公園でカヌー、野外バーベキュー等 2) ウィンタースポーツの体験…カーリング、ボブスレー等</p> <p>◆文化交流活動◆ 1) ミニエキスポ…各国のブースを設けて交流 2) リレハンメル市民に対するパフォーマンス…ダンスなど</p>
<p style="text-align: center;">参加校: クーベルタンスクール</p> <ul style="list-style-type: none"> • Australia Winners of the Australian Coubertin Award • Austria Pierre de Coubertin Bundes-Oberstufenrealgymnasium, Radstadt • Austria Don Bosco-Gymnasium, Unterwaltersdorf • China Beijing High School Four Pierre de Coubertin • Czech Republic Gymnazium Pierra de Coubertina, Tabor • Estonia Ülenurme Gümnaasium, Ülenurme • Germany Pierre de Coubertin-Gymnasium, Berlin • Germany Pierre de Coubertin-Gymnasium, Erfurt • Great Britain William Brookes School, Much Wenlock/England • Greece 1st Gen. Lyzeum Pierre de Coubertin, Pallini (Athens) • Italy Liceo Statale "Giuliano della Rovere", Savona • Norway Gausdal videregående skole-Pierre de Coubertin • Russia Middle School No.211 Pierre de Coubertin, Sankt-Petersburg • Slovakia Gymnazium Pierra de Coubertina, Piestany 	<p style="text-align: center;">参加校: オブザーバースクール</p> <ul style="list-style-type: none"> • Cyprus Pierre de Coubertin-Pancyprian Gymnasium, Nicosia • Japan University of Tsukuba Senior High School at Otsuka, Tokyo • Kenya Kipkeino School, Eldoret • Malaysia Senior Methodist Girls School Kuala Lumpur • Mauritius Winners of the National Coubertin Award organised by the Mauritius Pierre de Coubertin Committee <p>名簿に載っているが参加できなかった国</p> <ul style="list-style-type: none"> • Zambia • Congo <p>注) Mauritius は1日遅れての参加</p>

やらオーストラリアは、これもシドニーオリンピックがきっかけのようだけれども、オリンピック教育を国を挙げてやっていこうということで、州ごとにクーベルタン・アワードをゲットするためのユースフォーラムをやって、優秀高校生がセレクトされて2年に一度の国際フォーラムにやってくるという形です。

それから、グレート・ブリテンは、先ほどから出ているウィリアム・ブルックススクール、マッチ・ウェンロック、ここがやはり貫禄がありますね。「俺たちはルーツなんだぞ」というような感じでね。オブザーバー・スクールは、2名の生徒です。キプロス、ジャパン、ケニア、マレーシア、モーリシャス。モーリシャスも、モーリシャス・ピエール・ド・クーベルタン・コミッティー、やはりアワードをやっているわけですね。それから、名簿に載っていたけれども、ザンビアやコンゴが参加できなかった。これが気になっていたのだけれども、いろいろと聞いてみると、ビザの関係や渡航費の問題があるようです。現地での滞在費はクーベルタン委員会が持ってくれるけれども、渡航費は自分たちで持たなければいけない。そうすると、

アフリカ諸国は渡航費を捻出するのが大変なようなのですね。ですので、今回は参加できませんでした。

参加国を見たら分かると思うけれども、ヨーロッパ、オーストラリア、アジアです。南北アメリカがいません。前回はメキシコが来ていたけれども、今回来ていません。やはりそのあたりに、今、クーベルタン委員会がやろうとしているこのプロジェクトの限界のようなものも、一方で感じました。委員会の人たちも困っているようでした。

長時間の移動の後、オスロの駅前に到着です。21時30分、まだ明るいですね。夜の10時ぐらいまで明るかったです。この頃は、日本時間で8月10日午前4時半という、こちらから向こうへ行くときに、一日が非常に長いのですね。翌日半日オスロ観光を楽しんでから、列車でリレハンメル駅に到着しました。感心したのは、いろいろなところに木材がふんだんに使われていることです。これは駅舎ですけれども、木の香りがして、いい感じでした。

到着してすぐ、世界各地から集まってきた高校生の顔合わせ、お楽しみプログラム。真ん中にあるのがノルウェーのボランティアのお姉さんですけれども、この人のリードで、いろいろな国の高校生が集まって、友達づくりゲームを早速やっているところです(資料28)。このような感じで軽く初日を終えて、泊まっていたところはこのような感じです(資料29)。つまり、94年の冬のオリンピックの施設をうまく活用したスポーツ・コンプレックスがここにできていて、これはスキー場、ジャンプ場ね。メイン会場の辺りだということです。それに隣接したコテージに、僕たちが泊まっていた。このコテージは、いろいろな国から4~5名ずつ寝泊まりする、1週間ということです。われわれ教師も同じようなことで、私は、エストニアのオレフさんと、ギリシャのコスタスさん、3人部屋の珍道中でした。

翌日曜日、初めて全員が、リレハンメルオリンピックのアイスホッケー会場かな。一角の部

資料 28



屋に集まって、「さあ、これから始まるよ」と。最初のプログラムは、講義ですね。ノルウェーのスポーツに関する講義や、クーベルタンの生涯についてのお話です。いろいろなプログラムが並行して行われていて、それぞれの国をA3判2枚分ぐらいのスペースで紹介する、フォーラム・パネルを作っているところです(資料29①)。日本は今回世界遺産となった富士山と神社の鳥居。なぜこのような構図になったのか

はわかりません。そして富士山の上で噴火しているように見える模様は、何か分かりますか。2020年招致のシンボルマークのつもりです。今回は、男子1人、女子1人の2人で行って、女の子が上手に下絵を描き、男が色を塗るという感じです。体育館は非常によくできていて、オリンピックのミュージアムになっています。

その日の夕食はウェルカム・パーティーで、一番右端が、クーベルタン委員会の会長のミュ

資料 29



ラーさんというドイツの方です(資料29②)。この日は、トラディショナル、あるいはフォーマルなウェアで来てくれということなので、日本の2人は学生服です。ふだんうちの学校は、制服はないのですけれども、このようなときだけ借りてくるわけです。セレモニーや食事の合間はみんな写真を撮り合っていました。

8月12日からいろいろなプログラムが始まっていきます。カーリングの体験を、私もさせてもらっています(資料29③)。いろいろな人たちとグループを作って、われわれ教師もそのどこかに入って、やらせてもらっている。それから、ボブスレーの体験もできるのですね。90kmの猛スピードを体験して、なかなか面白かったです。それから、林間コースでは、射撃やアーチェリーなど。これは、非常に面白いですよ。グループのメンバーが一つずつひもを持って、フックをみんなで動かして、このキーをこの木枠にポンと乗せたら1点というゲームで、お互いコミュニケーションを取りながら、「もっと右、右」「引っ張って、引っ張って」などと言いながら、英語で、イタリア、イングランド、ノルウェーで、みんな慣れない英語だけれども、何とかコミュニケーションを取ってやっています。

木材をグループで運んで、ドアがあって、窓があるログハウスを造ろうというゲームもやりました。短い木と長い木を、うまくお互いコミュニケーションを取りながらやろうというゲームです。みんなで記念写真を撮ろうということで、スキーのジャンプ台のところまで集まりました。上から見たら、1994年オリンピック会場であったこの施設の概要がよく分かると思います(資料29④)。右側にアイスホッケーの会場になる、今は体育館になっているところ。それから、もう一つアリーナ。陸上競技場があって、人工芝のサッカー場があって、この辺りにわれわれが泊まっていたコテージがあるという、そのようなところです。

ミニエキスポ(資料29⑤)。北京のときにもありました。今回はこの準備にかなり気合いを入れて、生徒たちと浅草に買い物に行ったりね。このようなものを通して、自分たち自身が日本の文化を知るといってもありますよね。外国の人に伝えるときに、「日本って、日本人って何だったんだろう」ということを改めて感じるわけです。私も浴衣を着ていますが、この浴衣を着るのは、前回の北京大会で引率したとき以来です。日常生活では着ないですね。これは、ドイツの子にこま回しを教えているところです。最後までできませんでした。今回、日本のパフォーマンスは、2人とも剣道部だったので、剣道の型を披露しました(資料29⑥)。他の国のパフォーマンスが、音楽を流しながら「みんなで踊ろう」式だったのに対して、あえて静かなムードを作りながら、侍魂といいますが、そのようなものを紹介する場で、非常に評判がよかったです。雨が降ってきて、最後は寒かったのですが。

翌8月13日はスポーツテストです。室内プール。水泳は選択です。それから、これは学校の

陸上競技場です（資料30③）。このようなところで、砲丸投げなど、いろいろとやっています。ストップウォッチではなくて、機械でタイムを測っていますね。陸上競技場の上の高台にも人工芝のサッカー場がありました。これが主催となったガウスダルの学校で、非常にきれいなところでした。体育館が二つあって、ハンドボール常設の体育館と、広いスタンド付きの体育館がある。生徒数300人ぐらいの学校のようなのですけれども、たった300人でなぜこのよう

資料 30



な施設と思うけれども、地域とデュアル・ユースしているのですね。こちらの体育館（資料30②）は、貼り紙などを見てみたら、地域のハンドボールクラブも使っている体育館。学校の図書館も、地域の人たちが自由に使えるような形になっていました。これは、生徒のホール。この右側の奥が、図書館になっています（資料30④）。

左下は、知識テストをやっているところです（資料30⑤）。知識テストが終わったら、今度はグループでのディスカッション。かなりタイトなスケジュールです。そのあと少し自由時間があって、先ほどの体育館で自由に遊んでいいというところで、スポーツを通じた国際交流。かわいそうに、エストニアのジュニアの砲丸投げチャンピオンの子は、バスケットボールをやっていて足をくじいてしまって、そのあとずっと松葉杖でした。それまで非常にひもじい食事だったのですが、この日から、ガウスダルの学校の食堂というよりも、何と言えばいいのだろう。非常においしいノルウェーの料理を食べることができました。これは誰が作ってくれているかという、地元のおじいちゃん、おばあちゃんが、ここに作りに来てくれているようです。ふだんからそのようです。非常に参考になりますね。

翌日はクロスカントリー。このような中を駆け抜けていきます（資料31①）。ゴールは陸上競技場。この日もタイトなスケジュールでしたが、つかの間の休憩を教師の談話室で楽しんでいるところです。午後はオリエンテーリング。生徒は多国籍の3人組で、学校周辺に設置されたポイントを回ります。ノルウェーはオリエンテーリングの盛んな国なので、運営は非常に慣れたものです。私も、同室のオルフさんと一緒に参加しました。また「120」を着ていますね（資料31④）。このような風景のところ、非常にゆったりしたい感じのところを、ポストをチェックしながら回っていく。レストランでの夕食前後にアート・パフォーマンス。時間があれば映像を見てもらいたかったのですが……。もう時間がないですね。このような会場で、それぞれの参加校が事前に準備してきたものを7分間で紹介します。オリンピックやスポーツ文

資料 31





化に関係した出し物です。

翌日は全員で国立公園へ出かけました（資料32）。非常にきれいなところで、伝統的なノルウェーの生活の体験をさせてもらったり、ムースという、後ほど食べるのですけれども、このような動物がたくさんいるのだという話を聞いたり。ノルウェーのバイキングが各地に進出できたのは、鉄が取れて、鉄器

を作る技術が昔からあったのだという話もお聞きしました。ムースの落とし穴や、チーズやバターをつくっているところ。ノルウェーの食事、農作業体験もあります。グループで、やかんのお湯を沸かすゲームですね。それから、カヌー体験。尾瀬のような感じのところでした。そして、これは、ムースの蒸し焼き（資料32④）。これがおいしかったのですね。最後は、またダンスパーティー。

資料 32





そろそろクロージングになっていきますけれども、リレハンメル市街へ出て、今度はわれわれの活動をリレハンメルの市民に知ってもらおうというプログラムでした(資料33)。これはその日の晩、大体、夜のティーチャーズ・ミーティング、机の下にお酒を隠しているのですが、右端のケニアの先生などと一緒に過ごしていました(資料33③)。実質的な最終日は、パラリンピックの種目なども体験できました。この人は、パラリンピックのノルウェー代表の卓

資料33







球選手. ボッチャというものを体験しているところです (資料33⑤). 驚いたけれども, あのアイスアリーナの一角に空手道場があって, 空手はかなり盛んようです. これもクロージング・セレモニーのようすです (資料33⑩). もうクロージングへ向かっています. 教師の懇親会. 私が泊まっていた部屋. ああ, もう成田に着きました.

第9回大会に参加して感じたこと, 考えたこと

今回, ただ参加するだけではなくて, 日本で何ができるかということを考えました. 主催者のクーベルタン委員会としては, クーベルタン・スクールを増やしたいという意向があるようですけれども, それは, 学校名にクーベルタンを入れるということなのですね. けどこれは, 歴史と伝統のある学校には難しいし, なじまない. そもそも人物名を学校名とするのは, 日本の習慣になじまないのかなとも思います. そうは言っても, クーベルタンの思想, 嘉納治五郎の思想は, しっかり広めていきたい. そこで国内向けのオリンピック・ユースフォーラムが

できないだろうか, オーストラリア型の. そのようなことを考えていて, 特に2020年が東京でのオリンピックなので, 2021年の国際フォーラムを日本でできないか. それで逆算して, 国内のユースフォーラムを早い段階でできないかということを考えています.

それから, 別の観点で, 日本人の可能性と課題. 高校生の感想を見ても, 欧米の人たちが非常にオープンなこと

資料 34

国際 PdC ユースフォーラムに参加して (2013)

◆日本で何ができるかを考えた…

- 1) 「クーベルタン・スクール」となることについては…
 - ・歴史と伝統のある学校には, 難しいしなじまない
 - ・そもそも人物名を学校名とするのは日本の習慣になじまない?
- 2) クーベルタンの思想=嘉納治五郎の思想は, 広めていきたい
 - ⇒国内向けの「オリンピック・ユースフォーラム」をやりたい!
 - ・国内の高校生を対象に「スポーツ」「オリンピズム」を伝える場を=オーストラリア型の導入

◆日本(人)の可能性と課題を考えた

- ・「シャイ」なのは語学力だけではない
- ・日本からの情報発信が必要!

に驚いたと書いてあるけど、それは、一つには言葉の問題はありますが、言葉の問題だけではなく、知らない人とつきあうことがあまり得意ではない日本人のシャイな性質によるのではないかと感じます。皆さんも、大学の同じサークルの仲間とは濃いつきあいをするだろうけれども、別のサークルの人たちとオープンにどれくらいやっているか。そのようなところも、やはり国際交流、お互いの理解というところから、あるのではないかと思います。

そのようなわけで、世界に誇れる日本の学校体育がオリンピック教育実践の場なわけですが、一方で、このような問題もあると思います。「体育とスポーツが混同している」、プレイが否定されている。「チームのみで、クラブが育たず」、この言葉の定義は、後で勉強してください。「コートの外は後回し」、「最後の大会が終わると引退」。このようなことに疑問を感じない人は、スポーツの勉強をもっとしてもらったほうがいいと思う。やはりスポーツの勉強をしっかりしていると、「おかしいな」と感じると思います。

では、なぜそうなったのか。高等教育機関の学生が、学校単位で取り組み、定着した。これがスタート。彼らの持つ上昇志向、エリート意識、武士道精神が、真面目さを基に道を究める独特のスポーツ観を育んだ。学校間の対抗競技会は、スポーツと教育の問題を誘発した。競技会のようすは、独特のスポーツ観とともに、メディアによって繰り返し伝えられた。その結果、「学校体育の充実と貧困な生涯スポーツ環境、偏ったスポーツ観に基づく限定的・閉鎖的なスポーツ習慣が定着」。この言葉の意味と中身は、後で考えておいてください。

そして、それがストレートな原因とは言わないけれども、いろいろな要素が相まって、体罰の問題などというのが、昨年夏から大きく社会問題としてクローズアップされているわけですね。ここからのスライドは、今年の体育学会で少し話をする機会があったので、そこで使ったものです（資料

資料 35

その一方で…

- ◆体育とスポーツが混同
 - ・青少年期の教育の手段としての“スポーツ”
- ◆プレイ（遊び）の否定
 - ・競技志向で「道」を究める姿が求められる
- ◆チームのみで「クラブ」は育たず
 - ・競技会への参加単位である「チーム」優先
 - ・チームは学年進行。「引退」して「OB・OG」に
- ◆「コートの外」はあとまわし
 - ・更衣室・シャワー室・談話室がない体育施設
 - ・下校で部室を追い出された生徒はコンビニへ
- ◆「最後の大会」が終わると「引退」？
 - ・「年度単位」、「競技」志向、「チーム」のみ

なぜ日本のスポーツ観・スポーツ環境 はこうなったのか？

- ・明治維新以降に外来文化として輸入されたスポーツは、高等教育機関の学生が学校単位で取り組み、定着した。
- ・彼らの持つ、上昇志向、エリート意識、武士道精神が、まじめさを求め、道を究める独特のスポーツ観を育んだ。
- ・学校間の対抗競技会は、スポーツと教育の問題を誘発した（例：野球毒論争）。競技会の様子は、独特のスポーツ観とともに、メディアによって繰り返し伝えられた。

↓

**学校体育の充実と、貧困な生涯スポーツ環境
“偏ったスポーツ観”にもとづく
“限定的な（閉鎖的な）スポーツ習慣”が定着**

資料 36

<p style="text-align: center;">「体罰」の背景Ⅰ：個人の問題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 勉強不足である <ol style="list-style-type: none"> 1) 文化としてのスポーツの理解が不十分 <ul style="list-style-type: none"> ・“競技”のみ、“チーム”のみ、“する”のみ… 2) 指導する種目の理解が不十分 <ul style="list-style-type: none"> ・分析し、修正する力がない⇒観察する目と、アイデアの不足 ・言語化できない。経験に依存 <ul style="list-style-type: none"> → 一般化できない → 広がらない → 閉鎖空間を形成する 3) 指導対象の理解が不十分 <ul style="list-style-type: none"> ・レベルやニーズを把握できていない 2. パーソナリティに問題がある 3. 置かれた状況に問題がある → 組織の問題 	<p style="text-align: center;">「体罰」の背景Ⅱ：組織の問題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学校の中で… <ol style="list-style-type: none"> 1) 厳しい指導を担わなくてはならない立場に置かれる <ul style="list-style-type: none"> ・体育教師＝生徒指導担当教師として ・生徒にいちばん近い存在として <ul style="list-style-type: none"> (「なにも先生」よりも「部活先生」の方が熱心) 2) 勝つことが要求される <ul style="list-style-type: none"> ・学校の経営戦略として <ul style="list-style-type: none"> 例) スポーツで名を上げた ・進路の選択肢を保障・開拓するために <ul style="list-style-type: none"> 例) 推薦入学枠の確保、特待生の確保と保証 ・教師としての身分を維持するために <ul style="list-style-type: none"> 例) 勝たなかったら「クビ」となる私立学校の講師 2. 競技団体の中で… <ul style="list-style-type: none"> ・競技団体に代わって“選手強化”を担われる学校運動部 → 構造の問題
<p style="text-align: center;">「体罰」の背景Ⅲ：構造（仕組み）の問題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学校運動部の構造の問題①-“スポーツ”の観点から <ol style="list-style-type: none"> 1) 選手制度 <ul style="list-style-type: none"> ・一つの学校に一つのチーム。部員が多いと補欠増、少ないと競技会参加不能 ・3年間同じ「チーム」に所属し、「選手」を目指す <ul style="list-style-type: none"> (・活動は学校(生徒会・同窓会・後援会含む)がささえてくれる) 2) トーナメント中心の競技会 <ul style="list-style-type: none"> ・負ければ終りのノックアウト方式。常に「勝つ」ことが求められる。 <ul style="list-style-type: none"> →「グッドルーザー」が育ちにくい。 ・勝てば勝つほど負担(金銭的・時間的)が増大。ミスマッチも生じやすい。 3) 在校生のみを対象とする <ul style="list-style-type: none"> ・少子化、ニーズの多様化で、部活動が維持できない ・現状では、他校生や卒業生のための受け皿とはならない 4) 競技団体が担うべき部分を、学校運動部が請け負ってしまったている 2. 学校運動部の構造の問題②-“教育”の観点から <ol style="list-style-type: none"> 1) 生徒も教師も、あまりにも多くのエネルギーを注ぎすぎている 2) (多くのエネルギーを注いでいるので)多くの教育的効果が期待されている <ul style="list-style-type: none"> ・プレイ空間としてでなく、規律を学ぶ場として期待されている ・教師-生徒の関係を基盤として指導が為される 	<p style="text-align: center;">「体罰」根絶へ向けて</p> <p style="text-align: center;">スポーツ習慣を改め、スポーツ観を見直すために！</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ユース年代のスポーツ環境の抜本的な改革を！ <ol style="list-style-type: none"> 1) 学校でできること⇒もっとある！新たな可能性の追求を！ <ol style="list-style-type: none"> ①学校という“組織”でできることは… <ul style="list-style-type: none"> ・保健体育の授業の充実 → 「スポーツ観」を見直すスポーツ教育を！ ・学校運動部の“活性化” <ul style="list-style-type: none"> →レベルやニーズに応じた「スポーツ習慣」を形成するための多様な活動を！ ②学校という“施設”でできることは… <ul style="list-style-type: none"> →競技団体or地域社会or卒業生や保護者etc _もっともっと活用できる！ 2) 学校でできないこと⇒無理してやらない、抱え込まない！ <ul style="list-style-type: none"> 競技団体 or 地域社会 or 卒業生や保護者 etc に任せる (「学校でしなければならないこと」には責任を持って取り組む。当然かつ前提) タテ割り意識とヨコ並び意識をなくし、よりオープンに！ 2. あるべき姿の共有を！ <ol style="list-style-type: none"> 1) スポーツを勉強の二者択一でなく、“文武一道”を強く推進する 2) ロールモデルとなる人や組織をメディアで取り上げ、あるべき姿を共有する <ul style="list-style-type: none"> ⇒オリンピック教育への期待
<p style="text-align: center;">今後へ向けて (2013)</p> <p style="text-align: center;">- サロン 2002 の可能性を踏まえて -</p> <p>◆現状認識</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) スポーツ界の改革は「待ったなし」の状況にある！ <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ指導・学校教育における「体罰」・暴力・ハラスメント問題社会全体が注目している！ ・100年以上続いてきた日本のスポーツ環境を“本気で”見直すとき 2) スポーツ界に「追い風」が吹いている！ <ul style="list-style-type: none"> ・2020年東京オリンピック開催決定！ 今後の動きに社会全体が注目している！ いつやるの？ いまでしょ！ <p>◆誰が？いつ？何を？</p> <p>COREは？ JOA？ JOCは？ 高体連は？ そしてサロン2002は？</p>	<p>36). 個人の問題はあるでしょう。組織の問題もあるでしょう。だけれども、やはり仕組みから見直していかなければいけないということを、私は強く感じております。体罰根絶へ向けて、抜本的な改革を、あるべき姿の共有を、スポーツと勉強の二者択一ではなく、文武一道を強く推進する。先日、中央大学の加納先生が書かれた文章を</p>

読ませていただきましたが、同じことを書かれておりました。それから、ロールモデルとなる人や組織をもっと取り上げ、あるべき姿を共有する。そのようなところで、オリンピック教育への期待もあるなど。

今後へ向けて、現状認識。スポーツ界の改革は、待ったなしの状況にある。僕は、実はかな

り危機感を抱いております。そして、追い風が吹いている。危機感と同時に、チャンスというように思っています。「いつやるの？ 今でしょ」というところですね。誰が、いつ、何を。サロン2002の話が出てくるのですが、話せば長くなるから、省略します。後でホームページを見ておいてください。このようなことを考えながら、今、やっています。

資料 37



ということで、2020年に東京に決まりました。非常にはしゃいでいますね（資料37）。あの旗を持ってはしゃいでいるのは、安倍さんではないですか。「意識を変え、習慣を変えよう。始めれば始まる。最初の一步を踏みだそう。続けることにエネルギーが要る。続けるためには、ぶれない理念、志を」ということで、質疑応答の時間も食ってしまって、一気に話してしまいました。

まだ多少時間があると聞いておりますので、ぜひ皆さんからの質問や感想などを聞かせていただければと思います。私の方で用意した話は、以上です。ありがとうございました。

〈質疑応答〉

Q. 貴重なお話をありがとうございました。2回にわたってユースフォーラムの方に参加した4名は、参加する前と参加後で、やはり意識の違いと申しますか、学内でも発揮されていたのでしょうか。

A. 学内はもちろんですが、滞在中の1週間で随分変わったなということを感じますね。例えば、英語を使ったコミュニケーション。僕もそれほど得意ではないのだけれども、コミュニケーションできるのです。それは、伝えたいから。「俺、伝えたいぞ」ということがにじみ出るから。

北京大会に参加した2人のうちの1人は、学校の英語の成績はとてもよい、いい子なのです。ところが、グループディスカッションのときに、何も話せない、話さない。隣に英和辞典を置いているけど、それを見てやっている場合ではないでしょう。何か思ったことを、日本語でもいいから何でも話せばいいのですが、きちんとした英語になっていないとだめだと思込んでいるのか、話さないわけです。同じグループの子が、気を利かせて「君が言いたいのは、

こういうこと？ ああいうこと？」と言ってくれて、ようやく口を開くような感じだったけれども、2日たって、3日たっていくと、文法などどうでもいいのだ、伝えたいことを何でもいから口から出せばいいのだということがわかってくる。何か言えば、それに対して、同じ人間なのだから、「何かを伝えたがっている」ことは伝わるわけで、コミュニケーションが始まるのです。こういうことに気づいて、後半はかなりオープンに、フランクに、インチキ英語でやっていました。そのようなことは、いろいろある中の一つですけど、1週間の中で変わったことですね。

4名の生徒が行って、帰ってきたわけですが、どうだろうな。劇的に何がどのように変わったかということは何とも言えないけれども、間違いなく参加した生徒たちの中でのこの1週間は、人生の大きなトピックになるのではないかと思いますね。

Q. 商学部2年のWと申します。今日はありがとうございました。最後にお話があった体罰についてなのですが、私も高校は割とスポーツが盛んな高校で、この体罰の問題が非常にメディアで言われるようになったときに、一斉に調査のようなものがありました。何人か、やはり母校の先生で体罰ということでスポットを当てられてしまって、学校の先生からも、その方はサッカー部の監督だったのですが、言われて、先生を辞めてしまったかたがいらっしゃったのですが、実際にそこで過ごしていて、体罰とまでは思っていなかったと思うのです。生徒たちもみんな。確かに部活に対しても質より量と言われているような学校だったのですが、体罰の定義は何なのだろうと私は思っていて、実際に体育教師をやられている中塚先生から見て、教えていただきたいなと思ったのですが。

A. 法学部の人に教えてほしいな。体罰の定義とは何か。ただ、何だろうね。してはならないということは昔から、法的にもね、恐らく。けれど、今言われたように、例えばこれもコミュニケーション。特に私は大阪の出身なのだけれども、体罰ではないけれども、「こら、おまえ、あほか」というようなことはよくあるのです。日常の会話の中で、それを体罰と捉えられてしまうと、そして、それで職を失うことがあるとすると、ちょっとやってられないという感じはあるのです。

ただ、「おまえ、あほか」とやっていたところも、これをきっかけに、見直さなければいけないのだろうと思います。大阪の漫才を見ていると、少しやりすぎではないかと思うことがあるでしょう。時々、いじられ芸人がボコボコにやられるのを、テレビで見ながら面白がっている風潮。それが、どこかで行き過ぎになって、いじりがいじめになっていくのです。恐らく、では、どこまでがいじりで、どこからがいじめなのかというと、その法的な定義は、法学

部の人に教えてほしいところです。ですから、明確な結論は出せません。しかし、やはりこれを機に、見直さなければいけないということを強く感じています。ちょうど私は、全国高体連の研究部活性化委員会の委員長をやっています。高体連自体がこれに正面から向き合って、何とかしていこうということを、1月の全国研究大会で、先ほどのスライドを使って現場の先生にドカンと言おうと思っています。

今言われたように、多分、結論はないのです。生徒と教員との人間関係がベースにある話だから。しかし、それでもそれぞれの指導者が、自分がやってきたことも見直そうということですね。僕自身も、ある本の中で「体罰」について書く機会があって、そこで暴露しているのですが、十数年前かな。お正月の高校選手権予選のハーフタイムに、キャプテンと副キャプテンを呼んで、みんないるところでバーンとやったことがあります。そのときはそれが必要だと思ってやったし、後悔もしていないし、卒業生との飲み会でその話になったときに、そいつらがそれをマイナスイメージで捉えていることもないから、多分よかったのだろうとは思いますが、法的に言ったらそれは体罰だし、今から思うと、もっと違うやり方もあったかもしれないという気もするし、なかなか難しいですね。

Q. 教育学専攻のHといいます。日本の中・高の体育の授業で、運動能力に非常に差が出てきてしまって、みんなで楽しくやるという空気がなかなか作りづらくなっていると経験上思うのですけれども、それに対してどのように思って、また、中塚さんが授業内でそのようなことに対して何か工夫してやられていることがあれば、教えていただきたいと思います。

A. 山ほどあります。といいますか、体育の授業というのは、今言われたように、本当に個人差だらけなのです。部活は、ある程度似たような人たちが集まっているけれどもね。ただ、まず一般論から言うと、非常に残念ながら、多くの体育の先生は「部活先生」です。部活の指導をしたくて先生になった人なので、はっきり言ってあまり勉強していないわけです、残念ながら。ですから、部活と同じような練習を体育でただやっているだけ。そうすると上手な子が目立って、苦手な子はどんどん嫌な感じになって、それでおしまい。そのような授業ではなかった？

Q. 僕は、結構下手だったのですけれども、楽しんで、上手な子と結構やっていました。「下手くそ」と言われながら。

A. それは、なぜ。君のパーソナリティーなの？

Q. とにかく自分がスポーツが好きなので、楽しみたいということを前面に出したら、上手な人からも受け入れてもらえたのかなと思っているのですけれども、よく分かりません。

A. 素晴らしいですね。そのような話が僕も非常に参考になっています。そのような人を育てたいわけです。上手、下手だけではなくて、「あ、スポーツって楽しいんだな」と少しでも思ってくれるような子を、体育の授業で増やしていきたい。

では、どうしたらいいのかというと、例えば小さい頃の遊びの中で、幼い弟や妹と一緒に遊んだときに、「おみそ」や「お豆」など、そのようなルールを経験した人はいませんか。経験したことがある人？ ない人？ そうか。ここなのです。同世代とばかり、似たような者とばかりやっているとそのような発想が出てこないけれども、小さい弟や妹は、お兄ちゃんたちと一緒にわーっと遊ぶ、その空間にいらればいいわけ。鬼になってデーんとタッチされても、弟や妹は鬼にならないという、例えばそのようなルール。そのような特別ルールを用意することによって、みんなが一緒に遊べる。

例えばサッカーの授業でも、高校3年生で、男女一緒にやるのです、選択の授業で。そこでは、今言っていたようなことが授業のメインテーマになってきて、どうすれば男女で徹底的にサッカーを楽しめるかということを生徒たちは考えるわけ。今どきの高校生はアイデアが乏しいので、こちらからヒントを出さざるをえないのだけれども、それも含めていろいろと出てくる中で、例えば、女の子が点を取ったら2点。男子の中でサッカー部員は、苦手な方の足しか使ってはならない。得意な方の足に当たったら反則。あるいは上手な人は、タッチ数制限があって、ツータッチ以下、あるいはワンタッチしかしてはならない、あるいはこの範囲しか動いてはならないなど、工夫すればたくさんできるわけです。

それを、遊びを作りながら考えていくことが大事ではないかと思っていて、体育の中でそれはやるべきだし、いわゆる生涯スポーツにもつながってくる、大事な遊び方の勉強になるのではないかと思っやっています。うちの学校は、いつでも授業を公開しているので、いつでも来てください。

演者紹介：

中塚義実氏

筑波大学附属高等学校保健体育科教諭

サッカー部顧問／DUO リーグチェアマン

サロン2002理事長

筑波大学蹴球部同窓会若友 SC 理事長

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム運営委員